

浄土真宗との邂逅

ポーランド浄土真宗サンガ主管

アグネス・妙珠・エンジエスカ

欧州の各国で浄土真宗に帰依する人々の集まりが開かれている。

築地別院の英語法座にも御法話いただいたアグネス・妙珠・エンジエスカ女史は「ポーランド真宗サンガ」主管として浄土真宗のお念仏を伝える活動をされている。

アグネス女史は第二次世界大戦中にカトリックの実業家の両親のもとに生まれた。両親はカトリックの学校に娘を通わせたが、「神が創造主であるなら、何故私たちが不完全だということに罰するのか」という疑問を抱き、無神論の学校に自分の意志で転校した。その後神経病理学を学びワルシャワ大学の助教授となりポーランドにおけるこの分野での第一人者となった。この頃女史は「何のために生きるのか」という問いを抱えていた。

答えを見いだせずにいたその時期

に、ロシア語の通訳マルガレータさんと出会った。既に仏教徒であったマルガレータさんの話す仏教に関心をもち、アグネス女史はラマの主催する瞑想会に出席した。しかしその活動には馴染めず参加を止め、マルガレータさんを通して念仏にご縁をもつポーランド人と出会った。

ある夏、この男性から「日本人二人とヨーロッパ人一人を空港に迎えにいったほしい」と頼まれ、徳永道雄師、野村伸夫師、アドレアン・ペール師の三人の真宗僧侶に出会った。三人は集会の場所を探しているというので自分のアパートを提供、数人の人が集まり、讃仏偈のお勤めをした。「光顔魏魏……」を聞いて意味はわからないままに、心の底からこみ上げてくる感動を感じた。

翌年ペール師が再びワルシャワを訪れたときポーランド浄土真宗の代表になるように要請され、重ねて日本の(故)山崎昭見師より手紙での説得を受け代表になった。

その時以来、名号本尊や多くの本が日本より贈られ、毎日称名念仏していくなかで、女史は自分が浄土真

宗に属していると確信した。

「ポーランド人はいつも『念仏はどういう働きがあるのか。何が得られるのか』と聞きます。しかし、いただいた英訳された本の多くはキリスト教の言葉を安易に使っているために誤解をあたえます。そこで私は自分の言葉で説明せざるをえなくなりました。念仏には仏のエネルギーである功德すべてが含まれていません。私たちは念仏を称える時それを受け入れますが、私の努力ではありません。自分で計らわず仏の働きにお任せすれば大きな心の変化が急速におこってきます。仏の無限の智慧と慈悲をいただく、すべての者が同じ価値をいただくのです。念仏をいただくだけで全ての一切の生きとし生けるものを仏になるのちとして見る事ができるようになります。良いとか悪いとかを超えてこの世界を宝石のように見る事ができます。念仏は何もしないでこの世に背を向けることではなく、むしろ念仏を通してこの世にかかわっていくことなのです」と女史は語る。

構成 酒井 淳

築地本願寺仏教青年会公開講座

“法話を聞こう！ えっ落語も？”

法話：小林 顕英師 「なぜ、四天王寺参り」

落語：笑福亭松喬氏 「四天王寺参り」

日時：2000年(平成12年)2月26日(土)午後3時30分～午後5時

会場：本願寺築地別院 第2伝道館 蓮華殿